

# 第54章

## モロナイ7章

### はじめに

この章には、モルモンが力強い説教が息子モロナイによって記録されている。モロナイ7章までのモルモンの聖文に関する働きは、おもに他の預言者たちが残した記録を要約することだったが、この章には、義にかなった教会員たちに向けられたモルモンが力強い説教が記されている（モロナイ7:2-3参照）。モルモンは霊的に退廃しつつあった社会に住む聖徒たちに、神に近づく方法を教えた。この説教では、わたしたちが行動する際にふさわしい動機や目的を持つ必要性や、善と悪を見分ける方法、そして信仰と希望と慈愛の重要な関係が強調されている。

### 注解

#### モロナイ7:2-3 「主の安息」

・聖文には「主の安息」について度々書かれている。ジョセフ・F・スミス大管長（1838-1918年）はモロナイ7:3を引用した後、次のように記している。

「これは非常に重要な聖句である。ここに言われている安息は、肉体的なものではない。なぜならイエス・キリストの教会には、肉体的な安息などというものはないからである。これは、人の心の中にある、真理に対する確固とした確信から生まれる霊的な安息と平安を言っているのである。わたしたちはこのように福音の真理を理解するようになって初めて、今日主の安息に入ることができるようになるのである。……すべての人がこの安息を求めなければならないわけではない。なぜなら今すでに得ている者が多くいるからである。その人たちの心は、満足している。また高い召しにつける目標に目を留め、真理の中にとどまろうと確固たる決心をしている。また、イエス・キリストに従う聖徒たちのために記された道を、謙遜に、義にかなって歩んでいる。……」

わたしはこの真理を知るようになったことを天の御父に感謝する。また、イエスがキリストであって、キリストにのみ安息と救いがあることを知って、天の御父に感謝する。人と哲学に従う人は欺かれている。これは神が生きておられるように確かなことである。しかしキリストに穏やかに従う弟子の安息に入って、そのとき以来、天でキリストとともに安息を得るまで大きな希望を持つ者は、幸福である。」（*Gospel Doctrine*, 第5版〔1939年〕, 126, 128）

#### モロナイ7:3-4

キリストに「穏やかに従い」「穏やかに交わって暮ら〔す〕」とはどのような意味か  
（教義と聖約19:23も参照）。

#### モロナイ7:6-9 「真心から」

・十二使徒定員会のダリン・H・オークス長老は、すべての人は同胞に奉仕する機会が数多くあるが、何よりも重要なのは奉仕する動機であると述べている。

「天の御父がわたしたちの考えや志を知っておられることは、多くの聖句が教えているところです（教義と聖約6:16；モーサヤ24:12；アルマ18:32参照）。預言者〔モルモン〕は、自分の働きを良いものとして認めてもらうためには、正しい動機で行わなければならないと教えています。……」

……これらの聖句からはっきり分かるように、教会における奉仕や同胞への奉仕を清いものとするためには、どのように奉仕するかということだけでなく、なぜ奉仕をするのかについても考えてみなければなりません。

人が奉仕を行う動機は様々です。また、動機の善し悪しの程度もいろいろです。……わたしたちは最高にして最善の動機によって奉仕しなければなりません。

……例を挙げてみたいと思います。動機となるものをすべて挙げるようなことはせず、6つだけ挙げ、次元の低いものから高いものの順に、話してみたいと思います。

1. この世的な報いを期待して奉仕する人がいます。……
2. 奉仕の第2の理由として、良い友達を得たいという望みが動機になっている場合があります。……
3. 人によっては罰を受けるのが怖くて働く人もいます。……
4. 義務感のため、また友人や家族、伝統に対する忠義心で奉仕する人もいます。……
5. それ以上に尊い動機……の一つは永遠の報いへの希望です。……
6. 最高の動機……は、愛〔です〕。……

……神に仕えるには、勢力と体力を尽くすだけでは十分ではありません〔ありません。〕わたしたちの心の中を読み、思いを御存じの神は、それ以上のことを期待しておられるのです。終わ

りの日に神の前にとがなくて立つためには、心と思いを尽くして奉仕しなければならないのです。

心と思いを尽くして奉仕することは、だれにとっても大変なチャレンジです。そのような奉仕は、利己的な野心と無縁のものでなければなりません。そのような奉仕の真の動機となり得るのは、キリストの純粋な愛以外にありません。」(『聖徒の道』1985年1月号, 12-15)



・大管長会のマリオン・G・ロムニー管長(1897-1988年)は、義になかった事柄を行ううえで純粋な動機を持つことの重要性に関して、次のような個人的な経験を話した。

「25年ほど前に、ロムニー姉妹とわたしは集会所の建設が始まったばかりのワードに転入しました。そこで、ビショップから求められた献金額に、わたしはかなり動揺しました。わたしが考えていた額の少なくとも2倍はあったからです。しかし、わたしはそこそこ教会で比較的高い責任を受けたばかりだったため、[断る]ことはとてもできませんでした。そこでわたしはこう言ったのです。『分かりました、ビショップ。お引き受けします。でも、それだけのお金がないので、分割して少しずつ納めることになりました。』こうしてわたしは建築基金を納め始め、続けていくうちに、やがて納めるのも3回を残すのみになりました。そんなある日、モルモン書を読んでみると、次の聖句に目が留まりました。

『……ささげ物をして、惜しみながらする[ならば]、ささげ物をしなかったと同じように見なされる。したがって、神の御前で悪と見なされる。』(モロナイ7:8)

すでに1,000ドルを納めていたわたしは、この聖句に愕然としました。わたしは約束した額の残りを続けて納め、それから、わたしが正しい態度で献金してきたことを主に知っていただくために、さらに余分に納めました。」(“Mother Eve, a Worthy Exemplar,” *Relief Society Magazine*, 1968年2月号, 84-85)

・大管長会のヘンリー・B・アイリング管長は、誠意を込めて祈ることには、主からどんな指示を受けても喜んで従う意思を持つことも含まれると教えた。「若いジョセフ・スミスは、そのような祈りをささげる方法を示しています。ジョセフはヤコブの手紙の中に記されている約束を信じました。そして、祈れば答えを受けられるという信仰を胸に、森の中に入って行きました。ジョセフはどの教会に加わるべきか知り

たかったのです。ジョセフは従順であり、命じられたことをすべて行う備えができていました。ジョセフは祈る前からすでに従おうと決意していました。そして、わたしたちもそうしなければなりません。」(『リアホナ』2003年11月号, 90)

## モロナイ7:12-19 キリストの光

・『聖書辞典』(Bible Dictionary)では以下のように説明されている。

「キリストの光はその言葉のとおり、人類を啓発し、知識を与え、高め、気高くし、守る、イエス・キリストからの影響力である。その一例は、キリストは『世に来るすべての人を照らすまことの光』であられる(教義と聖約93:2; ヨハネ1:9)。キリストの光は『広大な空間』を満たし、これによってキリストは『万物の中にあり、万物を貫いてあり、万物の周りにある』ことがおできになる。キリストの光は『万物に命を与え』『万物が治められる律法』であり『[人の]理解を活気づける光』でもある(教義と聖約88:6-13, 41参照)。このように、キリストの光は人の良心と関係があり、人はキリストの光によって善と悪を見分けることができる(モロナイ7:12-19参照)。

キリストの光と聖霊の御方とを混同してはならない。キリストの光は人格的な存在ではない。その影響力は人が聖霊を受ける備えとなる。キリストの光は『その声を聴く心の正直な人を導き、真実の福音と真実の教会を見いだして、聖霊を受けられるように備えさせる(教義と聖約84:46-48参照)。(“Light of Christ,” 725. 『聖句ガイド』「光: キリストの光」の項; 『真理を守る——福音の参考資料』[2005年], 62も参照)

・「良心はキリストの光の現れであり、人が善悪の判断ができるのはこの力によります。」(『真理を守る』62)「キリストの御霊」(モロナイ7:16)と「キリストの光」(モロナイ7:18-19)は、聖文の中で同義語としてよく使われている。

十二使徒定員会のボイド・K・パッカー会長は、この光は善悪を識別するために与えられた賜物であると証している。

「キリストの光、道徳観念、良心など、呼び方はどうあれ、この内なる光、つまり、善悪を区別する知識には、自分で弱めたり無視したりしないかぎり、自分の行動を支配し、変える力があります。……

あらゆる男性、女性、子供は、国、信条、肌の色を問わず——どこに住んでいようと、何を信じていようと、どんな職業に就いていようと——だれでもその内に不滅のキリストの光を持っています。」(「キリストの光」『リアホナ』2005年4月号, 8-10)

・ジョセフ・フィールディング・スミス大管長（1876 - 1972 年）は、聖霊とキリストの光の違いを挙げている。

「聖霊と、広大な宇宙を満たしどこにでもある御霊とを混同してはならない。御霊は人格を持たず、姿形があるわけでも一定の空間を占めるわけでもない。これは御父と御子の御前から発せられてすべてのものの中にある。聖霊について語るときは『聖霊の御方は……される』と表現するが、御霊については『それ』と呼ぶ。また、聖霊の影響力や聖霊の賜物について語るときは『それ』と呼ぶ。

聖霊は神会の第三位の御方であって、霊の存在であられることが近代の啓示で教えられている。神の御霊、主の御霊、真理の御霊、聖き御霊、慰め主などの言葉は同義語として用いられており、いずれも聖霊について言及している。これらの言葉は、真理の光、キリストの光、神の御霊、主の御霊とも呼ばれるイエス・キリストの御霊を指すときにも広く用いられている。しかし、この二つはまったく別個の異なったものである。明確に用いてこなかったため、これについて相当の混乱がある。」（*Doctrines of Salvation*, ブルース・R・マッコンキー編、全3巻 [1954 - 1956 年]、第1巻、49 - 50）

・キリストの光を通して与えられる神の霊感は、この教会の会員だけに限られているわけではない。キリストの光は、これまでも世界の多くの指導者に影響を与えてきた。

「大管長会は次のような声明を発しています。

『マホメットや孔子、宗教改革者など世界の偉大な宗教指導者や、ソクラテス、プラトンなどの哲学者たちは、神の光の幾分かを受けた。国々を啓蒙し、個々人の理解をより高い水準に高めるべく、倫理的真理が神から彼らに与えられた。……

わたしたちは、神がすべての人に永遠の救いに向かって歩むに十分な知識を授けてこられたこと、またそれが今後も続くことを信じている。』（「全人類への神の愛に関する大管長会の声明」1978 年 2 月 15 日）（ジェームズ・E・ファウスト「聖きみたまとの交わり」『聖徒の道』1980 年 9 月号、16）

・十二使徒定員会のロバート・D・ヘイルズ長老は、キリストの光と聖霊の賜物の関係について次のように説明している。

「わたしたちは皆、キリストの光と呼ばれる光を持って地上にやって来ます。……

キリストの光を使って正しいものを見分け、それを選ぶことによって、わたしたちはさらに大いなる光へと導かれます。それは聖霊の賜物です。」（『リアホナ』2002 年 7 月号、77）

## モロナイ7:17 邪悪なところから来る靈感

・サタンは啓示を強要したり、無理に得ようとする人に対して、偽りの啓示を与える力を持っている。サタンから来るメッセージは、常に人をキリストから引き離す。ボイド・K・パッカー会長は、これらの偽りの霊からのメッセージに関して次のように勧告している。

「邪悪なところから来るささやきにだまされないよう、常に注意してください。偽りの靈感を受けることもあり得るのです。偽りの天使がいるように、偽りの霊も存在するのです（モロナイ7:17 参照）。だまされないように注意してください。悪魔は光の天使に姿を変えて現れることもあるのです。

わたしたちの霊的な部分と感情的な部分とは密接な関係にあるため、感情の高まりを霊的なものと取り違えてしまう可能性があります。受けた本人は神から与えられた霊的なささやきと考えているのに、実際は感情的なものであったり、悪魔からのものであったりということがよくあります。」（「主のともしび」『聖徒の道』1988 年 12 月、37）

## モロナイ7:19 - 25 「善いものをことごとく手に〔する〕」

・モルモンは、信仰は善いものをことごとく手にするための鍵であると教えた（モロナイ7:25 参照）。信仰によって「善いものをことごとく手に〔する〕方法」について、扶助協会家庭訪問メッセージは次のように教えている。

「個人の証を培うには、まず心に願い、次に信仰と希望を増すような選択をする必要があります。『善いものをことごとく手にできる』よう願うにつれて、自然に信仰を増すような行動を選択するようになるのです。例えば、次のような行動を取ります。

充実した祈りの時間を持てるように計画する。

定期的に聖餐を受け、神殿に参入することにより主と交わした聖約を覚え、新たにします。

正しい道を選ぶための『道路地図』として聖典を活用する。

証を強めてくれるような人々と友達になる。

日々の生活の中で奉仕を行う。（「善いものをことごとく手にする」『聖徒の道』1991





年 4 月号, 25)

・マイカリーン・P・グラスリ姉妹は、中央初等協会会長会で奉仕していたとき、わたしたちが善を行うとき神と協働していると語った。「それと同じようにして、わたしたちは天の御父がわたしたちに望んでおられることを知ることができます。この霊の感覚を訓練することができます。この霊の感覚は、良いことをすることによって鍛えられます。聖典の中にはこのように教えられています。『わたしは、……善悪をわきまえることができるように、キリストの光の中で熱心に求めることを切に勧める。もしあなたがたが善いものをことごとく手にして、それを非難しなければ、あなたがたは必ずキリストの子となる。』(モロナイ 7:19)」「(救い主に従う)『聖徒の道』1990 年 1 月号, 94)

#### モロナイ 7:22 - 32

この聖句に書かれている原則に従うと  
「善いものをことごとく手に〔する〕」ために  
どのような助けが得られるか。

#### モロナイ 7:29 - 31 仕える天使

・十二使徒定員会のジェフリー・R・ホランド長老は、モルモン書は天使の実在を明らかにしていると説明した。

「モルモン書の深遠なテーマの一つは、天使の役割と、天使が福音の歴史の中で広く、中心的な働きをしてきたことに関してであるとわたしは確信します。……

長く生きれば生きるほど、生活の中で重要性を増すことの一つは、天使の実在と働きと務めです。わたしがここで語っているのは天使モロナイについてだけではなく、わたしたちとともにあり、わたしたちの周囲にいて、わたしたちを助けるための力を付与され、実際に助けている、個人個人に仕える天使についてです(3 ニーファイ 7:18; モロナイ 7:29 - 32, 37; 教義と聖約 107:20 参照)。……

わたしたちは今以上に、天使の働きを信じ、それについて証する必要があるとわたしは信じています。天使たちは、幕を超えて証を伝える神の偉大な方法の一つであり、その原則についてモルモン書ほどはっきりと力強く教えている書物は、この世のどこにもありません。」(“For a Wise Purpose,” *Ensign*, 1996 年 1 月号, 16 - 17)

・七十人のブルース・C・ヘイフェン長老は、天使たちは今も人の子らに教えを与え続けていると教えた。

「これらの目に見えない天使の働きは、天と地をつなぐ最も崇高な交流の一つに数えられます。神がわたしたちを心にかけておられることの力強い証であり、大変な状況にある人々に対してははっきりと認識できる確信と霊的な支えを与えてくれるのです。……

天使はいつ訪れるのでしょうか。わたしたちがふさわしくあろうと努力するなら、天使はわたしたちが最も必要とするときに近くに存在するのです。」(“When Do the Angels Come?” *Ensign*, 1992 年 4 月号, 12 - 16)

#### モロナイ 7:29 - 31

具体的に、仕える天使にはどのような使命があるか。

#### モロナイ 7:32 - 39 イエス・キリストを信じる信仰

・十二使徒定員会のリチャード・G・スコット長老は、イエス・キリストを信じる信仰を持つとはどのようなことかについて次のように勧告している。

「イエス・キリストへの揺るぎない信仰を持つことは、自分の人生を輝かしい光であふれさせることです。そうなれば、自分には解決できない、あるいは一人ではどうしようもないと思われるような問題に直面したときにも、一人で苦しむ必要はなくなるでしょう。主はこう言われました。『あなたがたはわたしを信じるならばわたしの心にかなうことを何事でも行う力を持つであろう』と(モロナイ 7:33, 強調付加)。

今、絶望し、罪の重さに苦しみ、病にかかり、孤独で、慰めや励ましがすぐにでも必要だと感じている方々に厳粛に証します。助けが約束されている霊の律法を心に留めて従うならば、主は確かに助けてくださいます。主は皆さんの御父です。皆さんはその御父の子供です。御父は皆さんを愛しておられます。御父は皆さんを決して落胆させたままにはしておかれませんか。わたしは御父が皆さんに確かに祝福を下さることを知っています。」(『聖徒の道』1992 年 1 月号, 95)

#### モロナイ 7:40 - 44 希望

・モルモンは、キリストを信じる信仰からもたらされる、あるいは生じる希望について語った(モロナイ 7:40, 42 参照)。主イエス・キリストの生涯と使命を中心とした希望には、わたしたちが直面するいかなる試練をも乗り越えさせる力がある。大管長会のジェームズ・E・ファウスト管長(1920 - 2007 年)は、希望は問題を抱えた生活に平安をも

たらずと教えた。

「わたしたちの能力や知識、力や才能を超越している希望のすばらしい源泉があります。その中には、聖霊<sup>たまもの</sup>の賜物があります。神会の一員であるこの御方のすばらしい祝福によって、わたしたちは『すべてのことの真理を知る』ことができます（モロナイ 10：5）。

希望、それは心の錨<sup>いかり</sup>です。年齢を問わず、また、強い者であろうと弱い者であろうと、また金持ちであろうと貧しい者であろうと、希望を必要としない人はいません。モルモン書の中でこのように勧められています。『さて、神を信じる者はだれであろうと、もっと良い世界を、まことに神の右に一つの場所を、確かに望むことができる。この望みは信仰から生じ、人々にとってその心をしっかりとした不動のものにする錨となる。そしてそのような人々はいつも多くの善い行いをし、神をあがめるようになる。』（エテル 12：4、強調付加）……

この世では、だれでも難題や課題に遭遇します。それはこの世の試練の一部なのです。それらの試練がなぜ与えられたのかは、信仰と希望の原則によらなければ容易に理解できません。それはしばしば、わたしたちにはいつも理解できるとは限らないより大きな目的があるからです。平安は希望から生じます。』（『リアホナ』2000年1月号、71）

・十二使徒定員会のジョセフ・B・ワースリン長老（1917－2008年）は、わたしたちは常に天からの助けを得られるので、希望を持つことができると教えた。「たとえ逆境の嵐<sup>あらし</sup>が吹きさすさぶときでも、御父はわたしたちが信仰に根ざした生活ができるように助けてくださいます。主はこう約束してくださいました。『わたしはあなたがたを捨てて孤児とはしない』（ヨハネ 14：18）『[わたしたち]の苦難を聖別して[わたしたち]の益としてくださる』のです（2ニーファイ 2：2）。試練がどんなにひどいように思えるときでも、わたしたちは主の確かな約束から、力と望みを得ることができます。主はこう約束されました。『……恐れてはならない。おのいてはならない。これはあなたがたの戦いではなく、主の戦いだからである。』（歴代下 20：15）」（『聖徒の道』1999年1月号、28）

#### モロナイ 7：43－44 「柔和で心のへりくだった人」

・管理ビショッププリックのH・デビッド・バートンビショップは、徳とは何かについて、また柔和さを身に付ける過程について説明している。「柔和であることは、さらにキリストのようになるのに不可欠です。柔和でなければ、そのほかの大切な徳を伸ばせないからです。モルモンは述べています。『柔和で心のへりくだった人でなければ、神の御前<sup>みまへ</sup>に

受け入れられないからである。』（モロナイ 7：44）柔和さを身に付けるには段階を踏む必要があります。わたしたちは『日々自分の十字架を負う』ことを求められています（ルカ 9：23）。時々背負うものではありません。また、柔和になるとは、弱くなることではありません。『それは思いやりと優しさを行いに表すことです。それは確信と強さ、落ち着きを反映し、健全な自尊心と真の自制心を映し出します。』（ニール・A・マックスウェル、"Meekly Drenched in Destiny," *Brigham Young University 1982-83 Fireside and Devotional Speeches* [1983年], 2）さらに柔和になるなら、御霊<sup>みたま</sup>により教えを受けられるようになるのです。』（「さらに聖く<sup>きよ</sup>なお努めん」『リアホナ』2004年11月号、99）

#### モロナイ 7：44 信仰、希望、慈愛

・十二使徒定員会のM・ラッセル・バラード長老は、信仰、希望、慈愛という重要な真理の関係について次のように説明している。

「使徒パウロは神聖な3つの原則がわたしたちの生活の基盤となると教えました。それは信仰と希望と慈愛の3つです（1コリント 13：13 参照）。三脚いすの脚のようにこの3つはわたしたちを支える土台となります。一つ一つの原則はそれ自体重要なものですが、同時に互いを支え合う大切な働きもしています。それぞれはほかのものなしでは不完全です。希望は信仰をはぐくみ、真の信仰は希望を生み出します。希望を失い始めると信仰も弱まります。信仰と希望の原則がともに作用するときには、3つの中でいちばん大切な慈愛も伴わなければなりません。モルモンによると『この慈愛はキリストの純粋な愛であって、とこしえに続く』ものです（モロナイ 7：47）。慈愛は信仰と希望が完全な形をとったものです。

これら3つの永遠の原則は一つとなって働き、永遠にわたる広い視野をわたしたちに与えてくれます。それは預言によって終りの日に来るとされる艱難<sup>かんなん</sup>を含め、人生の最も困難なチャレンジに直面するときに必要なとなります。真の信仰によって将来に対する希望がはぐくまれ、自分自身や目の前の煩いごとを超えた立場で物事を見られるようになります。わたしたちは、希望によって強められるとき、日々のクリスチャンとしての奉仕と神への従順さを通して、キリストの純粋な愛を実践できるようになります。』（『聖徒の道』1993年1月号、39 参照）

・十二使徒定員会のニール・A・マックスウェル長老（1926－2004年）は信仰、希望、慈愛の特質が、いかに完全にイエス・キリストに結びついているかについて次のように説明している。

「わたしたちをキリストのみもとに導く信仰と希望と慈愛の 3 つが互いに関連し合っているにも驚くに当たりません。信仰の対象は主イエス・キリストであり、希望はキリストの贖罪から与えられ、慈愛は『キリストの純粋な愛』だからです（エテル 12：28；モロナイ 7：47 参照）。このすべての属性が日の栄えの王国に入る資格を与えてくれます（モロナイ 10：20－21；エテル 12：34 参照）。まず何よりも、一人一人が柔和謙遜になる必要があります（モロナイ 7：39，43 参照）。

このように、信仰と希望は常に関連し合っていますが、必ずしも厳密に区別はできません。どちらが先とも言えません。希望は完全な知識ではありませんが、疑いなくいきいきとした期待を人に抱かせます（エテル 12：4。ローマ 8：24；ヘブル 11：1；アルマ 32：21 も参照）。回復された神学という幾何学では、希望は信仰よりも大きな円周を描きます。信仰が増せば希望の円周もそれだけ広がります。」（『聖徒の道』1995 年 1 月号，39 参照）

#### モロナイ 7：44－48 慈愛——キリストの純粋な愛

・慈愛は、熱心な努力と特定の行動によって自分自身で身に付けるものだと考える人もいます。しかし、キリストの愛を身に付けるには、天の御父の助けと祝福が必要である。預言者モルモンは、慈愛を願い求め「熱意を込めて御父に祈りなさい」と熱心に勧めている。そうするならこの慈愛が「御子イエス・キリストに真に従う者すべてに授けられ」と述べている（モロナイ 7：48）。

七十人定員会のロバート・J・ホエットン長老は次のように説明している。「信仰と同様、キリストのような愛は御霊の賜物であり、個人の義にかかわる原則に基づいて、また与えられている律法に対する従順さに応じてもたらされるものです。信仰と同様、愛も実践することによって育てなければなりません。」（『聖徒の道』1999 年 7 月号，35）

・ダリン・H・オックス長老は、慈愛について、また慈愛を身に付けるためになすべきことについて次のように述べている。「慈愛、すなわち『キリストの純粋な愛』（モロナイ 7：47）は、人の行動ではなく、人の状態です。慈愛を身に付けるには改心へとつながる行動が常に必要とされます。こうして人は慈愛を身に付けた者となるのです。このため、モロナイが宣言したように、『人は慈愛を持たなければ、あなたが御父の住まいに用意して下さった場所を受け継ぐことができません。』（エテル 12：34，強調付加）」（『聖徒の道』2001 年 1 月号，42 参照）

・ジェフリー・R・ホランド長老は、わたしたちの生活においてなぜ慈愛がそれほど大きな祝福であるかを次のように教

えている。

「しかし『キリストの純粋な愛』のさらに偉大な定義は、わたしたちがクリスチャンとして努力しながら人に示すことがほとんどできていない事柄ではなく、キリストが完全な形でわたしたちに示して下さったことである。真の慈愛は、これまで一度しか人に知られていない。キリストの尽きることのない、究極の、贖いの愛こそが、完全で純粋な形で真の慈愛を示している。わたしたちに対するキリストの愛こそ『長く堪え忍び、親切であり、ねたまず、誇らず……容易に怒らず、悪事を少しも考えず、……すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。』キリストが示されたように『慈愛はいつまでも絶えることがない』のである。慈愛——わたしたちに対するキリストの純粋な愛——がなければ、わたしたちは何の価値もなく、希望もなくすべての男女の中で最も惨めな存在である。まことに、終りの日に主の愛による祝福——贖罪、復活、永遠の命、永遠の約束——を受ける人は幸いである。

だからと言って、このような愛をお互いに対して抱くようにすべきであるという戒めが過小評価されるわけでは決してない。……わたしたちは人との関係において、さらにうむことなく、尽きることなく、長く堪え忍び、親切になり、ねたまことをやめ、誇らないようにすべきである。キリストが生きられたように生き、キリストが愛されたように愛さなければならぬ。しかしモルモンが語った『キリストの純粋な愛』こそ、まさにキリストの愛である。この神からの賜物、贖いの賜物があれば、わたしたちはすべてを持っていることになり、それがなければ、何も持っていないだけでなく、何者でもない。最後には『悪魔の使いである悪霊』となるだけである（2 ニーファイ 9：9）。

人生には恐れや失敗は付き物であり、思うようにいかないこともある。人から裏切られることもある。しかし、どんなときも永遠にわたしたちを裏切らないものがある。それはキリストの純粋な愛である。……

このように、キリストの慈愛の奇跡はわたしたちを救い出し、変えもする。主の贖いの愛はわたしたちを死と地獄から救うだけでなく、肉欲的で世俗的で悪魔のような行いからも救う。その贖いの愛は、魂を変え、墮落した状態からはるかに高貴で、神聖な高みにまで引き上げてくれる。だから、わたしたちはキリストの純粋な愛である『慈愛を固く守』らなければならない。そして、主とすべての人を純粋に愛するように固い決意を持って努力しなければならない。なぜなら、その愛がなければわたしたちは何者でもないし、永遠の幸福の計画は完全に無駄になってしまうからである。わたした



ちの生活にキリストの贖いの愛がなければ、ほかのすべての特質——徳高い特質や模範的な善い行い——をもってしても、救いと喜びにあずかることはできない。」(*Christ and the New Covenant* [1997年], 336 – 337)

### モロナイ7:48 「熱意を込めて」祈る

• モロナイ7:48では、絶えず「熱意を込めて」ほかの何にも勝って求め、祈り続ける人には慈愛が与えられることを教えている。この熱意を込めた祈りは、ほかのものを求めて祈るときにも同様の結果が伴う。スペンサー・W・キンボール大管長（1895 – 1985年）は、熱意を込めた祈りが家族に与える影響について述べている。「家族が円くなって祈るとき、子供たちは両親の祈りを聞きながら、天の御父とどのように話したらよいかを学びます。わたしたちの祈りがいかに正直で心のこもったものであるかを知るまでに、それほど時間を必要としないでしょう。もし祈りがせわしげなものであったり、実のない形式的なものに流れがちであれば、子供たちも祈りをそのようなものとして受け取ることでしょう。家族の祈りや個人の祈りをささげるときは、次のモルモン<sup>はらから</sup>の勧めに従うとよいでしょう。『したがってわたしの愛する同胞よ、……熱意を込めて御父に祈りなさい。』（モロナイ7:48。）（『常に祈りなさい』『聖徒の道』1982年3月号, 2 – 3）



### 理解を深めるために

- モロナイ7章には、善悪を判断する基準としてどのようなものが挙げられているだろうか。
- 慈愛がすべての賜物<sup>たまもの</sup>の中で「最も大いなるもの」であるのはなぜだろうか（モロナイ7:46）。
- 人に奉仕をするとき、態度や動機はどのような違いをもたらすだろうか。

### 割り当ての提案

- モロナイ7:45 書<sup>📖</sup>に挙げられた特質とモロナイ7:48に記されたモルモンの呼びかけに基づいて、あなたの生活で慈愛を増すためにできることを短い文章にまとめる。